

『三毛猫ホームズの怪談 新装版』

(2016年)

赤川 次郎／著 光文社

片山義太郎は警視庁捜査一課の刑事である。妹の晴美と一緒に、石津刑事の引っ越し先の団地を訪れた。その近所には、開発から取り残された村がある。その村の猫屋敷とよばれる地主の家で、女主人と猫11匹の惨殺死体が発見された。遺産相続による殺人か。はたまた、土地の開発による村人との軋轢による殺人か。

その後、村では次々と殺人事件がおこる。血を見ると貧血をおこす片山と飼い猫のホームズが事件の真相に迫ります。



『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』

(2010年)

万城目 学／著 筑摩書房

マドレーヌ夫人は、かのこちゃんの家で飼われている猫です。マドレーヌ夫人は犬の言葉がわかるので、同じ家にいる柴犬の玄三郎と夫婦になり、幸せに暮らしています。飼い主のかのこちゃんは小学一年生。同じクラスのすずちゃんと仲良くなり、楽しく学校に通っています。

ある日、マドレーヌ夫人のしっぽが二本にわかれてしまいました。もしかして、人に化けるといいう「猫股」になってしまったのでしょうか。猫のマドレーヌ夫人とかのこちゃんの、少し不思議な物語。



『ノラや 内田百閒集成9』(2003年)

内田 百閒／著 筑摩書房

明治生まれの百閒は、夏目漱石の門下生で芥川龍之介に慕われていたと言われています。自他共に認める偏屈者の小説・随筆家で、亡くなる昭和46年までに多くの作品を遺しています。この『ノラや』は昭和32年に書かれたもので、飼うことになった経緯からノラの失踪、ノラ捜索中に飼ったクルツとの日々、さらにクルツの病死、再びノラへの思いなどが、鬼気迫る文体で詳細に記録されています。他、猫に纏わる短編も収録されています。



『図書館ねこデューイ』(2008年)

ヴィッキー・マイロン／著 羽田 詩津子／訳
早川書房

1988年の凍えるような冬、アメリカの中西部にある図書館の返却ボックスにふるえている子猫が入れられていた。図書館の館長ヴィッキーはその子猫を保護し、デューイと名付けた。

デューイはその人懐こい性格のおかげかたちまち人気者になり、図書館のアイドルに！ある時は利用者のひざに乗り、ある時は司書を元気づけ、またある時はイタズラしてみんなを困らせたり。そんな元捨て猫デューイが生きた18年を綴った一冊です。



『鉄道ねこ 英国の駅舎に暮らす猫を訪ねて』

(2012年)

石井 理恵子／著

トム 宮川 コールトン・奥田 達俊／撮影
新紀元社

どこを撮っても絵になるイギリスの鉄道風景と、鉄道と共に生きる個性的なにゃんこたちの写真がいっぱいの本書。登場する猫たちはみんな堂々としていて「ここは私の場所。私がボス。」とも言っているかのようです。猫たちの普段の暮らしをそのまま切り取ったような自然な表情の写真が、猫好きにはたまらない一冊です。



『猫島ハウスの騒動』(2006年)

若竹 七海／著 光文社

猫島は葉崎半島の西に位置する一周500メートルたらずの小さな島である。現在30人ほどの人間と100匹を超える猫が住んでいる。猫専門雑誌に猫島の猫たちが取りあげられてから、猫島はいまや有名な観光スポットである。夏休みを迎えた猫島は観光客でにぎわっていた。そんな中、ナイフの突き立った猫のはく製が砂浜で見つかった。また、マリンバイクを走行中に人間が降ってきて衝突したという通報が入った。平和な猫島に何がおこっているのか。

